



益田市市長  
山本浩章

世界初の元号は、中国の漢代、紀元前140年を元年とする「建元」とされます。その後、朝鮮、ベトナム、モンゴルなど中国周辺の一部でも使われることがありましたが、現在唯一の元号使用国が日本です。

我が国では西暦645年に始まる「大化」以降、時代を画する象徴的意味をも有する元号は、歴史的事件の名称に度々冠せられました。その多くは日本史の流れを決定づけたものです。

「大化の改新」で始まった天皇中心の国づくりの規範が「大宝律令」や「養老律令」であり、やがて栄華を極めた貴族の権勢が、「承平・天慶の乱」や「保元・平治の乱」を契機に武士に移ると、「治承・寿永の乱」とも呼ばれる源平合戦の末に樹立された鎌倉幕府は「承久の乱」を抑え、御成敗式目、別名「貞永式目」を定めるほどの実権を握りますが、元寇つまり

「文永・弘安の役」を境に衰えると、「建武の新政」で倒れ、続いて室町幕府が成立するものの、「応仁の乱」後は戦国乱世となり、これを統一した豊臣政権も「文禄・慶長の役」でつまずくと、江戸幕府が取って代わり、ついに「元和偃武」で天下泰平が到来すると、「元禄文化」と文化・文政年間に栄えた「化政文化」を庶民が謳歌し、その一方で武家政権の矛盾は「享保・寛政・天保の改革」でも支えきれず、幕末の「安政の大獄」は終焉の呼び水となるのみでした。

その後も、文明開化と富国強兵により未開の島国から世界の一等国にのし上がった「明治の精神」、モダンな文化とデモクラシーが開いた「大正ロマン」、恐慌に始まり未曾有の敗戦を経て廃墟から高度成長を成し遂げた「激動の昭和」、バブル崩壊と二度の大震災に見舞われた「混沌の平成」と、元号にはそれぞれの世相が刻まれています。

248個目の元号となる「令和」の由来は、天皇の御製から名もない庶民の歌まで幅広く収めた万葉集における梅の歌の序文の一節「初春令月、気淑風和」です。こめられた願いの通り、すべての人がそれぞれの花を咲かせられる、美しく和やかな御世となることを期待します。

中世益田講座「益田氏 VS 吉見氏」(全7回)

第2回 それぞれの出自

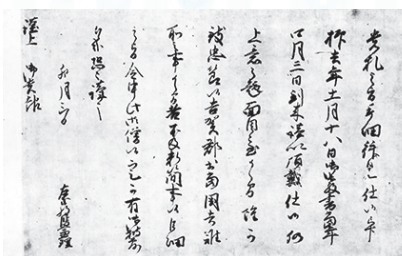
【問い合わせ先】市文化財課 ☎31-0623

益田氏と吉見氏は出自からして対照的です。

益田氏の祖は、石見国司として国衙(古代国家の役所)に赴任してきた御神本(藤原)国兼とされ、このような国衙の役人を在庁官人と言います。国衙には古代以来の国の情報(土地の台帳など)が集まっており、そのような情報をもとに地域に勢力を伸ばすことができたと考えられています。国兼の曾孫にあたる兼高は、源平合戦にあたって西国でいち早く源氏方につき、これにより、源義経から石見の武士の統率者としての地位(押領使)を、そして源範頼(頼朝の弟、義経の兄)から現在の浜田市域と益田市域を中心幅広い地域の領有を認められました。しかし、その後、一族は三隅氏、福屋氏、周布氏等と分かれていきます。

吉見氏の祖は源範頼です。範頼が武蔵国横見郡吉見(埼玉県比企郡吉見町)に領地を持ち、その子孫が吉見を名字とするようになりました。吉見氏はその後、能登国(石川県)や石見に領地を獲得し、能登を本拠とした吉見氏の分家が石見にやってきま

す。このように、もとは東国の武士で西国に移ってきた人々を西遷御家人と言います。西遷御家人は、縁もゆかりもない土地にやってくるのですから、現地をどう把握し、支配を受け入れさせるかが問題でした。その後、石見にやってきた吉見氏は、能登の吉見氏から自立します。ちなみに、西遷御家人の武士は、石見では他に、益田市横田町を本拠とした内田氏(その一族の俣賀氏も)、邑智郡川本町のあたりを治めた小笠原氏などがあります。石見では在庁官人出身の武士が多そうですが、全国的には在庁官人出身の武士で勢力を保ち続けた家は少なく、この点でも益田氏は注目されています。



東京大学史料編纂所蔵「益田家文書」の益田兼理請文案。益田兼理は、能登吉見氏から「石見吉見氏の自立をpushしてほしい」と依頼されますが、これを断っています。